瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 27
紅玉集 …… 30
俳誌交歓 …… 31
２月号月評 …… 32
恵贈句集拝見（71） …… 34
恵贈俳誌拝見（37） …… 36
特別作品「秋のイギリスを訪ねて」 … 38
句集「野山の道」共鳴句 …… 40
琥珀集作品鑑賞 …… 42
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 43
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ …… 44
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 45
他誌転載 …… 47
琵琶湖俳句サロン（４） …… 48
エッセイ「晩秋」 …… 49
イザナミの言語学（２） …… 50
相国寺吟行 …… 52

2014/2　第95号

今月の一句

椅子固し試験にのぞむ目をつぶる　桂樟蹊

（昭和九年作）

「入学試験に臨む実感を詠んだ」と前書きにある。昭和九年といえば今から八十年以前の句となる。樟蹊子自身の受験に臨む心構えをそのまま句に表現されているが、当時としては画期的な句であったと思われる。平成の世に作られた句と言っても時代のずれを感じない位に新しい感覚の句である。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

雪つばき

塩路隆子

冬帝のおらびをひと日岬の宮

星冴ゆる淋しきときの「冬の星座」

遊泳の宇宙士もどき雪ばんば

風邪心地鉛筆の芯尖らせて

どちらかと言へば火の性雪つばき

日だまりに背の斑麗し冬の鹿

秘めごとのひとつや二つ実千両

PDF= 俳誌の salon

二月号光耀抄

塩路　隆子選

龍の玉今年の評価は乙くらい　笠井　清佑
浜に干す近江蕪の万の赤　中川すみ子
同輩の無口ますます蟹の鍋　北尾　章郎
古民家の広き縁先寒雀　田中　浅子
物言はぬ昭和の漢達磨の忌　和田森早苗
溝蕎麦を地蔵にあづけケンケンパ　宮崎左智子
布団には児の温もりが残りけり　土井久美子
時雨るるや河川工事の早仕舞　山本　孝夫
吾が生のゆるりと縁の小春かな　中井　弘一
人生を全うせむと冬の星　川崎　利子
見どころは大寺裏や黄落期　国包　澄子
冬鵙の高音一声鯉動く　坂上　香菜
御破裂山の紅葉ここより登り口　坂根　宏子
刎頸の友は辛口燗熱し　塩路　五郎
不便ながら住み馴るるここ夕笹子　杉本　綾
イブを待つ踵の高き銀の靴　鈴木　照子
大胆な白き裸婦の絵膝寒し　竹内　悦子
友禅を着流すごとし紅葉燃え　辻　香秀

PDF= 俳誌の salon

白菜を住処とせしが五六匹　常田　創
棒鱈を鋸でひきをり師走市　中村ふく子
鉄鯨の進水式や秋日和　難波　篤直
ここ馬関焼牡蠣すする昼餉かな　橋本　靖子
着陸を待つ旋回やジャワの霧　藤本　秀機
人気者のミッキーマウス冬帽子　増田　一代
くの一の狼煙めきたる落葉焚　松岡　和子
味噌作る秘密保護法聞きながら　宮田　香
カクテルや火照りの頬に風涼し　森下　康子
蕉翁の生家そのまま土間冷ゆる　山口キミコ
ハレルヤに満つる天地冬うらら　山本　丈夫
車椅子離せぬ師走家恋し　飯田美千子
銀杏落葉浴びつオープンカーの勇　石川かおり
寒々と比叡に真対ふ四脚門　伊東　和子
さくさくと枯葉踏む音序奏曲　伊藤　和子
冬ざれやひときは赤きフラミンゴ　伊藤　純子
道路標の照り増す師走往き交へる　小澤　菜美
重力を忘れて浮かぶ雪ばんば　黒住　康晴
酢茎売る数珠と守りを傍らに　渡部　法子
冬霧に沈む町並月ほのと　木戸　宏子

PDF= 俳誌の salon

冬の燭彩色仄と伎芸天　三川美代子
赤目渓を貫く一気鵙の声　中井登喜子
杉戸絵の芭蕉仔狗図冬ぬくし　井口　淳子
銀杏散る舗道に箔を搏つ如く　落合　晃
しぐるるや野仏に問ふ別れ径　吉田　宏之
一口の酒にはんなり黄葉照り　大松　一枝
萩の宿老あつまればいくさ唄　山内タカ子
湘南の海明らかに小六月　粟倉　昌子
ささやかな贅なり柚子湯あふれさせ　伊藤　憲子
農婦の指太し勤労感謝の日　西郷　慶子
徳利に寒梅一枝夫の亡き　藤見佳楠子
着ぶくれて爪切る足を取り逃がす　阪本　哲弘
障子貼る仏間明るき日を受けて　笹井　康夫
鬼柚子を買ふや香味に好奇心　佐々木和子
お互ひの疲れ見ぬふり日向ぼこ　佐用　圭子
年の瀬に仁王立ちせる赤鳥居　鷲見たえ子
朱肉に朱満たして御用納めとす　常田　希望
池坊展秋の姿を正し見る　高谷　栄一
禿頭を隠す役目も冬帽子　谷口　俊郎
榾明りの手擦れ蔵書や船主邸　辻　知代子

PDF= 俳誌の salon

日当りて鎮もる書院冬紅葉　中本　吉信
観音の化身とも見て紅葉かな　西垣　順子
山茶花に触れつつ下るをとこ坂　西田　史郎
立冬や声高らかに歎異抄　西村　敏子
「まだゐたの」秋の飛蝗が小屋の戸に　能勢　栄子
天日干しの食感やさし茹白子　秦　和子
露座仏のお顔やさしや枯木道　福本すみ子
老嬉々とシルバー川柳かるた会　松田　和子
山あひに立てる湯けむり寒椿　松田　洋子
父の声なほ耳にあり北風吹かば　宮越　久子
冬晴れや青空を行く鳥の影　山崎　真義
枇杷の花咲けるを告ぐ夫在さず　山田　愛子
ガラス戸の汚れ目立ちぬ冬日和　横田　矩子
失へる時への回顧日向ぼこ　大島みよし
顔見世やまねき見上ぐる人の中　稲田　和子
並木路の枝打つづく旧街道　伊庭　玲子
ふるさとを発つ日朝より虎落笛　片岡久美子
会席の椀に添へられ柿紅葉　桂　敦子
をんならもエプロンはづし報恩講　小西　和子
三段に干され華やぐ赤蕪　小林　久子

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

おん祭

笠井 清佑

「會」の字の会津藩旗や冬座敷　（金戒高明寺二句）
容保の忠義の詮議冬ざるる
見上ぐれば濃いも薄きも紅葉なり　（真如堂）
奴さん風に吹かるるおん祭（春日若宮おん祭り二句）
寒夜切る剣の舞の蘭陵王
奥山に雲かかりけり師走風
龍の玉今年の評価は乙くらい

紅葉狩

中川すみ子

朝日差す窓辺に光る露の玉
浜に干す近江蕪の万の赤
人波に押されて低き紅葉山
三井寺の桧皮の反りや紅葉晴
外つ国の旗が先頭黄落期
紅葉の木々の間の眩しかる
穢れなき御苑のひと日紅葉狩

年　忘

北尾　章郎

被災者の涙や勤労感謝の日
南海トラフ語るや寒き出湯の窓
同輩の無口ますます蟹の鍋
青春歌渋き喉もて年忘
クリスマスキャロル流るる鄙の宿
冬の沖火山噴くてふおのころ島
スマホンがベンチ占領日向ぼこ

PDF= 俳誌の salon

石蕗の花

田中　浅子

古民家の広き縁先寒雀
夕暮れの雨を明るく石蕗の花
人力車過ぎたる後の散紅葉
吹き渡る風に色づく峪紅葉
島原の大門潜る一葉忌
波光り鴎飛び交ふ冬うらら
冬茜見つめる先の赤灯台

時雨宿

和田森早苗

酸っぱさの程よき加減青みかん
華やぎをひと皿加へ菊膾
連れあひの夜着かけ直す時雨宿
山茶花の散り初むる日の愁ひかな
物言はぬ昭和の漢達磨の忌
クレープにシロップさはや暮早き
俎の凹み気になる十二月

ポインセチア

宮崎左智子

溝蕎麦を地蔵にあづけケンケンパ
廃屋にいまも強か木守柿
百歳の仰せ言なり菊香る
木枯が吹き抜けて行く路地老舗
ポインセチアまだ見せませぬ赤き嘘
速報のよみ切れぬまま師走月
歌姫のちから尽きたり蝶凍つる

冬の夜

土井久美子

凍天に流星ゆると弧を描き
北風や三輪車の児へ容赦無く
早々に寝所に入れど虎落笛
冬の夜かぎ針出して試し編み
おでんの夜湯気に集まる子供かな
熱燗が良いねとおでん頬張れる
布団には児の温もりが残りけり

PDF= 俳誌の salon

小　春

山本　孝夫

庭木刈る鋏音よりぬっと顔
軒並に夜具の干さるる小春かな
時雨るるや河川工事の早仕舞
風一陣数多の枯葉奪ひけり
冬麗を鳶の滑空雲に消え
落葉踏み集ふシニアー落語会　（桔米朝一門会）
徐に開く箸紙文字堅し

小春日

中井　弘一

学舎の銀杏の黄葉天を掃く
冬ぬくし我が影映す寺の塀
日の射して玻璃戸まぶしき小春空
小春日や夫婦湯呑を買ひにける
木守柿日向ぼっこの顔ゆるぶ
吾が生のゆるりと縁の小春かな
お父さん紅葉バックにポーズとる

敷紅葉

川崎　利子

満天星紅葉参道に燃え圓通寺
磴のぼる足裏に優し敷紅葉
身に入むる若僧の講胸深く
見送りの僧の黙礼夕紅葉
櫓門に兵の声銀杏散る
人生を全うせむと冬の星

柚子風呂

国包　澄子

ふやけたる柚子を掬うて終風呂
見どころは大寺裏や黄落期
七五三疲れて父の肩車
自動ドア出てより北風に打たれたる
老犬の赤きマフラー蝶結び
僧坊の影の気配や白障子
初霰朽ちし軒端を容赦無く

PDF= 俳誌の salon

冬芽立つ　坂上　香菜

ラ・フランスとろけるやうな噛み心地
冬菊や肌艶の良き喜寿のひと
冬芽立つ桜透かしに朝の月
玻璃覗くサンタの背中産科院
公園の風車止まれる霜の朝
空を飛ぶビニール袋北風吹けり
冬鵙の高音一声鯉動く

飛天　坂根　宏子

御破裂山（おばれつ）の紅葉ここより登り口　（御破裂山辺り四句）
十三重の檜皮の塔や秋深く
柿喰みつ遠目に小さき石舞台
飛鳥路の花蕎麦深き紅の色
水煙を宙（そら）とし飛天秋の楽（薬師寺三句）
足裏を見せたる飛天小六月
薬師寺の土塀沿ひにて走蕎麦

刎頸の友　塩路　五郎

音たてて滾るティファール今朝の冬
刎頸の友は辛口爛熟し
煙突の無きマンションにサンタ来る
裸木となりても気品失はず
冬ざれや猿の群がる露天風呂
聞き流すことも処世や爛の酒
第九聴き余韻そのまま去年今年

小六月　杉本　綾

蓑虫の鳴くや眼を病むひとり住
不便ながら住み馴るるここ夕笹子
球根の衝動買ひや小六月
青空を広げゆくかに松手入
種採りて薬のごとく瓶に入れ
昃るや山茶花は身を震はせて
日の入りて名残の風炉や京干菓子

PDF= 俳誌の salon

聖夜を待つ

鈴木　照子

聖夜を待つ踵の高き銀の靴
「竜田川」てふ無人駅冬もみぢ
石蕗あかり撮る「ひこにゃん」の決めポーズ
鐘一打冬の桜を震はせて
パン焼く香乗せてベンチへ落葉風
袴姿の侍気分七五三
桃太郎に扮し小春の写真館

冬紅葉

竹内悦子

大胆な白き裸婦の絵膝寒し　（藤田嗣治展）
境内は火の山と化し冬紅葉
画家よりの個展案内や師走町
膝痛し登ることなき山眠る
かいつぶりの近寄れば去り距離保つ
冬の川氾濫後の岩動き
散り刻は己が決めをり冬紅葉

車井戸

辻　香秀

まなざしは草食系や寒仏
葉柄を突きたて無惨蓮枯るる
忘れられ土間にぽつりと大火鉢
石蕗咲いて町屋に残る車井戸
友禅を着流すごとし紅葉燃え
空あおき紅葉の海に裸婦の影
南座に揚がるまねきや百合鴎

初写真

常田　創

初空やふたり暮らしのまだ浅き
新年の陽の強まりし正午かな
ふたり減りひとり増えけり初写真
初吹のピアニカ自由自在かな
白菜を住処とせしが五六匹
白菜を包み直せる新聞紙
小丸餅八つ食べしが九つ目

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

雪ばんば

黒住　康晴

重力を忘れて浮かぶ雪ばんば
上気せる肩ぶつけ合ひラガー達
放浪の旅へいざなふ枯すすき
虎落笛インドの木偶の肩あらわ
北風を両手広げて抱ふる児

金戒光明寺

渡部　法子

山門に昇りて遥か冬の京
幕末の遺品さまざま冬座敷
上洛の會津史読みて底冷す
酢茎売る数珠と守りを傍らに
筆揮ふ僧の一文字年迫る　（清水寺）

冬晴

木戸　宏子

南座にまねき上りて年の暮
東天の流星見むと冬の暁
小春なる救世観音の笑み妖し
冬霧に沈む町並月ほのと
冬晴や裾ひく富士の神々し

冬夕焼

三川美代子

逆光の街並美しき冬夕焼
冬日差会話楽しむティールーム
時雨るるや比良の裾野の竹騒ぎ
冬の燭彩色仄と伎芸天
萩枯るるここより秋篠寺苑なる

赤目渓

中井登喜子

軒下に母手仕事のつるし柿
落葉浮かべエメラルドの淵静かなる　（春日四十八滝三句）
深谷の巌に光れる苔の露
赤目渓を貫く一気鵙の声
灯明に傾ぎ秋意の伎芸天

PDF= 俳誌の salon

二月号月評

塩路　隆子

龍の玉今年の評価は乙くらい　　笠井　清佑

面白い句を作られた。作者は毎年、年の暮に一年を振り返って自己評価をされているのであろう。今年の評価は甲・乙・丙・丁四段階評価の「乙」であったと言う。乙を使われたところにそれなりの年代が生じ、またその大ざっぱな評価に悲壮さも感じられない。平均以上であれば「まあまあか」と納得される作者が伺える。「龍の玉」の季語でイメージとして、日々大切に過ごされている作者の姿が見える。瓊百号の実行委員長として良く頑張っていただき「甲上」の評価を差し上げたい気分である。

浜に干す近江蕪の万の赤　　中川すみ子

琵琶湖の東北部には冬の風物詩として寒風にさらされている赤蕪の稲架が見かけられる。古くから伝統野菜として受け継がれた近江の自然の恵み豊かな蕪の漬物は、各地に発送され、守り伝えられた味として珍重されている。「万の赤蕪」の措辞が素朴な湖岸に住む人達の素朴な生活を覗えて、良い作品となっている。

同輩の無口ますます蟹の鍋　　北尾　章郎

作者自身も必要なときには自分の意見を述べられるが饒舌ではない。蟹鍋を食べに行かれた時の感想を句にされたものである。蟹が出てくると食べるのに夢中になって「皆無口になっている」というのが句の基本にある。同輩たちと蟹鍋に行かれた作者は、元々無口であった同輩がますます無口になって、夢中になって蟹を食べている様子をうまく句にされたものである。「ますます」の措辞が効果的である。

古民家の広き縁先寒雀　　田中　浅子

作者の思いもそうであったのかもしれないが、「われときて遊べや親のない雀　一茶」の句が頭を過る。「広い縁先」というだけで古い世代の人達の穏やかな、ゆとりのある生活が浮かぶ。その人たちの平穏な素朴な生活と、餌をもとめて人里を訪れる「寒雀」の安心感がえも言えぬ静かな空間を醸し出して良い作品に仕上がっている。手慣れた作者の組み立ての上手さに、こころの癒される句である。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon